WEP 俳句通信

ウエッブ俳句通信 VOL.88

特別作品25句●好井由江「おしろい」

特集●「60代俳人」

青柳高行(梓)「人生即遍路」
天野正子(澤)「放射状」
上田　桜(陸)「初紅葉」
大和あい子(百鳥)「初嵐」
加藤嘉風(郭公)「棄老伝説」
木之下みゆき(軸)「クレオパトラ展」
倉林美保(春耕)「御射山祭」
栗原憲司(蘭)「法師蟬」
坂本　登(OPUS)「隣組」
佐藤貞子(雨月)「鷹渡る」
清水京子(耕)「鮎塚」
相馬マサ子(燎)「風は秋」
田中　都(鮫)「梨」
玉井信子(隗)「夜の獣園」
辻まさ野(円座)「緘黙」
中平益美(青海波)「特許乱発」
丹羽啓子(馬酔木)「水韻」
火箱ひろ(船団)「日だまり」
森　恒之(雉)「八月」
安田青葉(対岸)「秋の草」
山内節子(運河)「秋の風」

【青山丈50句】
「この夏」

【実力作家競詠20句】
宇都宮敦子「をちこち」
大島英昭「草の花」
大塚阿澄「雲の峰」

【特別寄稿】
「俳句言語にとって美とはなにか
—俳句の表出論の試み—(その5)」
西池冬扇

●作品●
山崎ひさを・友岡子郷・秋尾　敏・三村純也・小林貴子・小泉八重子・
柏原眠雨・磯　直道・檜　紀代・須原和男・勝又民樹・穴澤紘子・
甲斐由起子・藤本夕衣・小川楓子

●好評エッセイ●
先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏(八)——句集『山響集』(二)」岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景——昭和十年代」井上康明
戦後俳句の戦略「秋桜子・波郷・登四郎・湘子——秋桜子と波郷の発奮」筑紫磐井
新連載・三橋敏雄「眞神」考「『眞神』を読むためのプロローグ」北川美美
虚子の肖像「虚子の不思議な句」坊城俊樹
岡本眸の俳句「明るさへ—『矢文』」小川美知子
地味で変な虚子句 五句集を読む「過ぎ去る時間」阪西敦子
虚子散文の世界へ「戦後の名品」本井　英

書斎にて

井上弘美

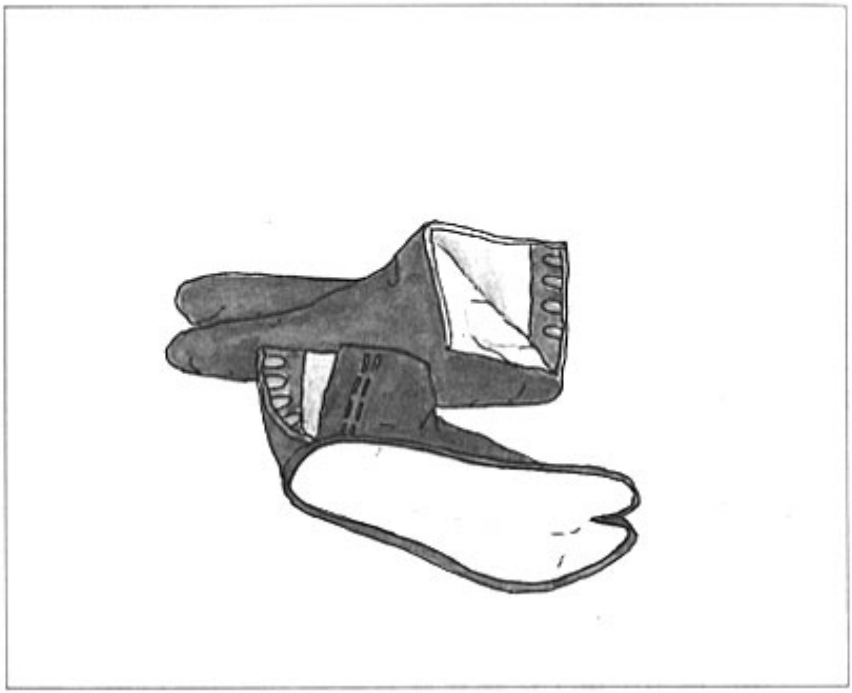

イラスト　田中九葉子

足袋（たび）

紺足袋の紺に好みのありしこと　後藤夜半

足袋ぬいでそろへて明日をたのみとす　細見綾子

日の出でて東さみしき足袋を干す　寺田京子

小学生のころは、冬になると足袋をはいた。紺色の足袋で、目が覚めると、枕元に置いてある足袋をはいた。そのとき、コハゼをはめるのによく手間どったものだった。洗濯して乾かした足袋はごわごわしていて、コハゼがはめにくかったのだ。

学校にいくと、スリッパなどはく子がいない時代だったから、足袋で床の上を歩いた。休み時間になると、雨や雪の日は、廊下を滑って遊んだものだ。そのおかげで、足袋の底に穴があいたり指の部分に穴が開いたりした。それを母親につくろってもらったものだが、仲間の中には白糸でつくろった足袋をはいている者もあり、結構めだったものだ。しかし、それをとやかくいう者はいなかった。そういう時代だったのだ。

学校の帰り道などでは、物干し竿の両端に足袋が干してある風景をよく見かけたものだが、その物干し竿には衣類ではなく、大根がぶら下がっていることがよくあった。

大崎紀夫

おしろい

好井由江

法師蟬夕べはここに水たまり

二つ三つ朝顔が咲き傘干され

おしろいを行きも帰りも見てしまう

徐々に徐々におしろいの白夕刊来る

駅のホーム踊が少し見えており

茄子の馬また茄子として残される

特集 60代俳人

「70代俳人」特集につづき、「60代俳人」特集を組みました。次世代を担う実力作家の登場を期待してのものです。21結社からご推薦いただいた21人の俳人にご登場いただきました。

をちこち

宇都宮敦子

水鶏鳴く古墳へ渡る橋もなく

踏んで脱ぐ水着に草の匂ひかな

レグホンの昼は眠たし薯の花

船虫の隠れて岩の端残る

竹煮草安全地帯焦げ臭し

麻の葉に刺して願ひの糸の色

海の香の礼所高きに登りけり

若沖忌縦か横かと馬の縞

郡鄙は玻璃の匣にて囲ひたし

うつのみや・あつこ
昭和10年（1935）・岩手県生まれ
平成7年俳誌「彈」に入会　9年俳誌「鳴」に入会　「鳴」「昭」同人　句集に『銀玉籠』　俳人協会会員

超結社句会／新12番勝負

ゲスト　中山和子・林三枝子
松本誠司・吉田光政
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集長　超結社句会の第29回目です。ゲストは「初蝶」同人の中山和子さん、「ときめき」主宰の林三枝子さん、「寒雷」同人の松本誠司さん、「天頂」同人の吉田光政さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士　今日は点が割れました。面白いですね。では、高点句からいきます。まず、4点句です。

引つ張つて二百十日の草の蔓　和誠光高

誠司　「二百十日」がこの句の中で生きている気がしましたね。良い句だと思いました。

高士　そんなもので宜しいでしょうか？

誠司　はい。

光政　いま、誠司さんが仰ったとおり、「二百十日」が効いていると思います。蔓を引っ張ってザザッと何かが動いたのだと思いますが、そんな感じがよく出ていると思いました。

和子　「二百十日」は厄日ですよね。だから草の葉が動いたときの一瞬の不安が詠まれていると思うんですよね。

高士　「二百十日」というと、それに関連することを詠んだ